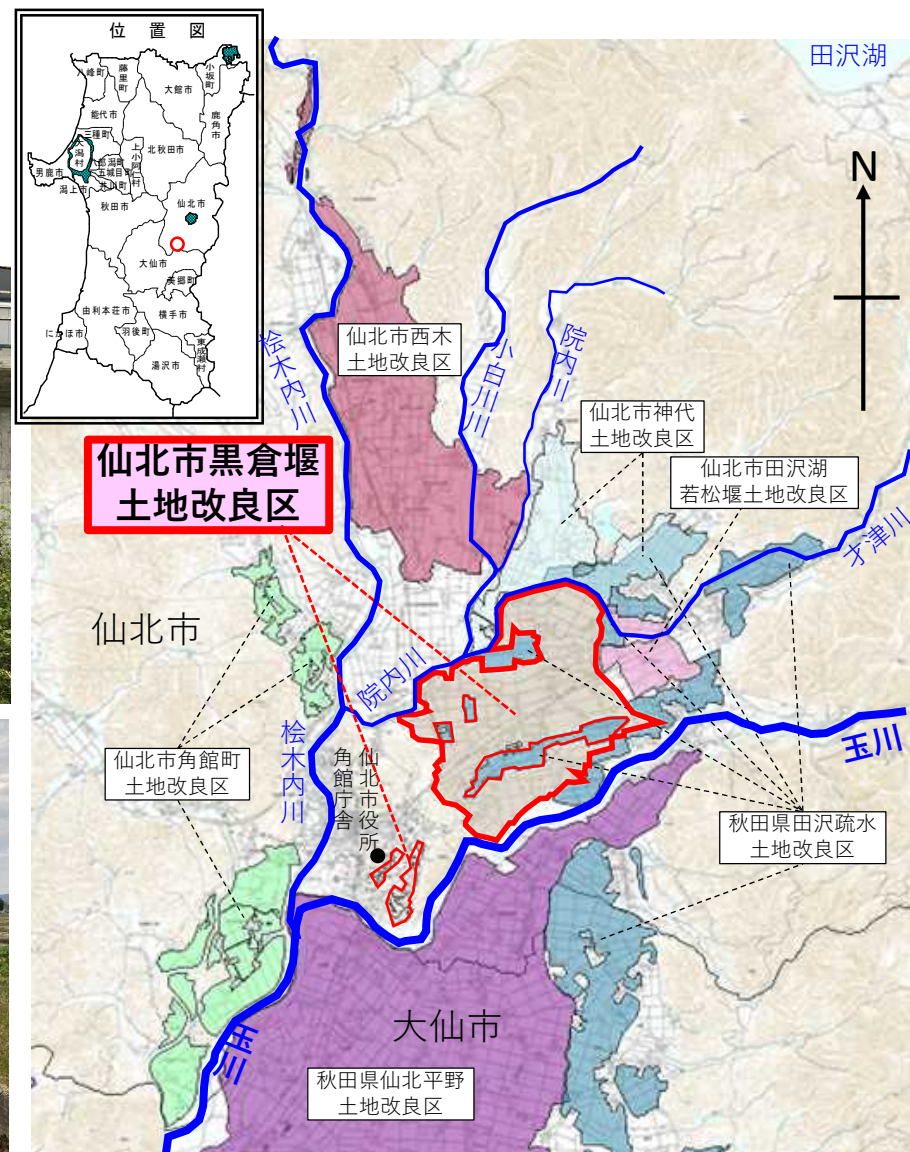
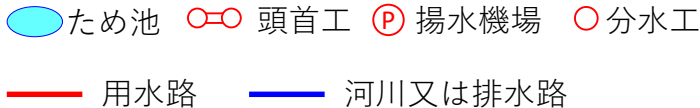


地域の概要



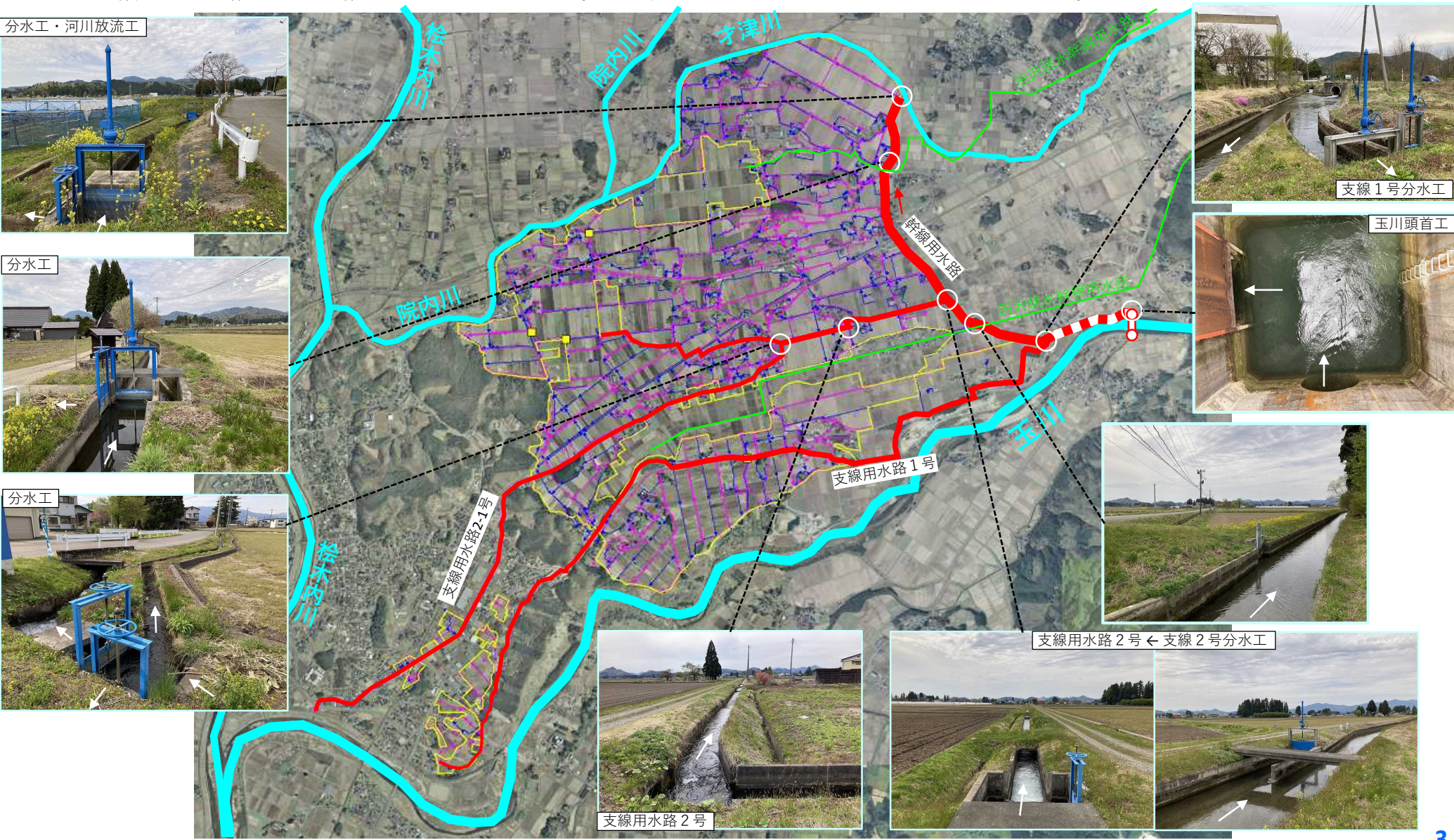
【内 容】

- 農業水利システム
- 用水系統
 - ・（各施設の状況）玉川頭首工
 - ・（各施設の状況）黒倉堰幹線水路等
- 施設の維持保全
- ほ場整備
- 土地改良区の歴史

作 成	秋田県 農業農村整備等技術検討委員会 秋田県仙北地域振興局農村整備課
協 力	・ 仙北市黒倉堰土地改良区 ・ 仙北市 ・ 秋田県土地改良事業団体連合会
作成経緯	ver. 1.0 令和 7 年 3 月
基本凡例	 ※ 資料作成の都合上、必ずしもこれらのとおりの表記となっていない場合がある
出 典	・ 秋田県水土里情報システムのレイヤを使用したものは次のとおり - 地形図：「測量法に基づく国土地理院長承認（使用） R6JHs 74-GISMAP59536号」 - 航空写真：「© NTT InfraNet, JAXA」 - 衛星写真：「© NTT InfraNet, Maxar Technologies.」 ・ その他土地改良区提供資料など
備 考	本資料は、秋田県の農業を支える基盤であり、地域資源でもある農業水利施設について、土地改良区毎にその構成、歴史、維持管理等の概略を示し、土地改良区の組合員のみならず地域住民の皆様に対し広く周知するものです。 これにより、各地域の農業水利施設を保全管理することの重要性について理解を深めていただき、農業水利施設の持続的な機能発揮と秋田県の農業の発展の一助となることを目指しています。 本資料については、現地調査に加え、水土里情報システム内の資料、過去に実施した事業の資料、土地改良区からの提供資料、土地改良区からの聞き取りなどをベースに作成していることから、時点が古い情報や現状と比較し正確ではない情報が含まれていることがあります。このため、本資料を閲覧される方に置かれましては、このことを予め御了知いただくとともに、本資料を利用すること等により生じるトラブルや損害等については、秋田県ではその責任を負いかねますので、予め了承ください。

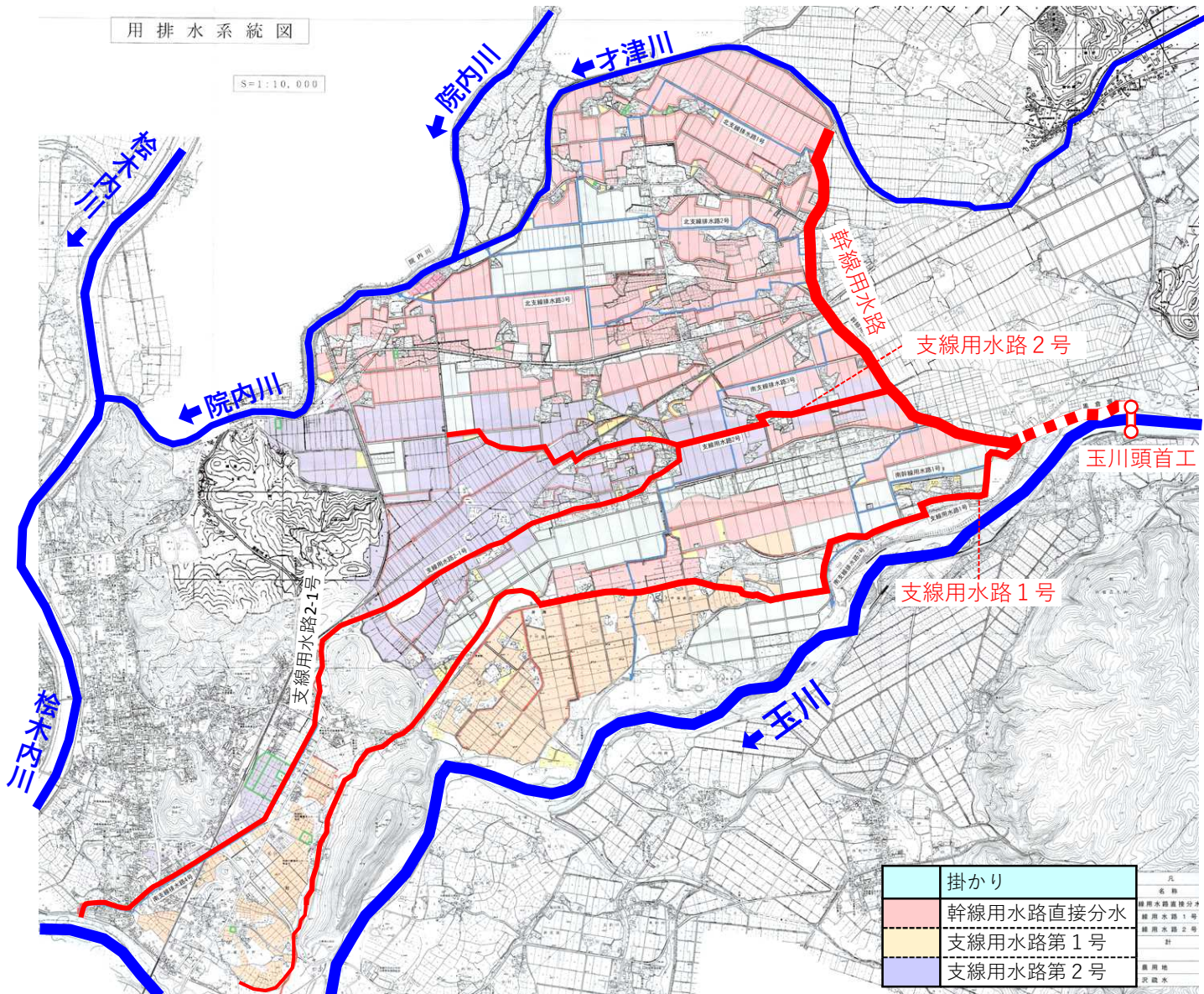
農業水利システム 玉川頭首工から幹線・支線・末端小用水路とも開水路の供給主導型システム

- 仙北平野土地改良区が管理する玉川頭首工左岸から取水し、サイホンを介し右岸側に導水。黒倉堰幹線水路は開水路。
- 支線水路、末端水路とも開水路の供給主導型システム。なお、地区内には田沢疏水の受益地が介在する。

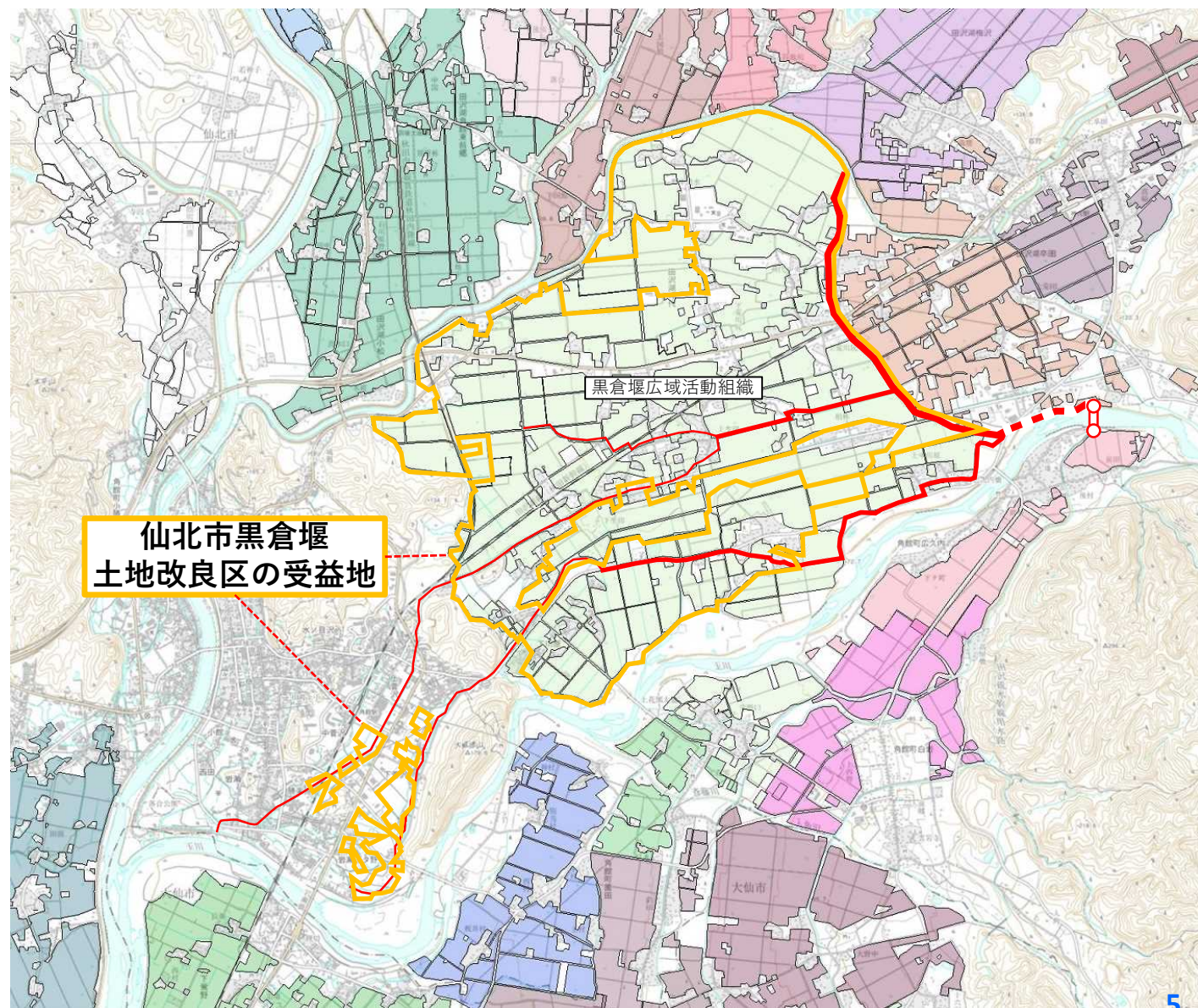


用水系統 玉川頭首工から取水する黒倉堰幹線用水路から各支線・末端小用水路に用水供給

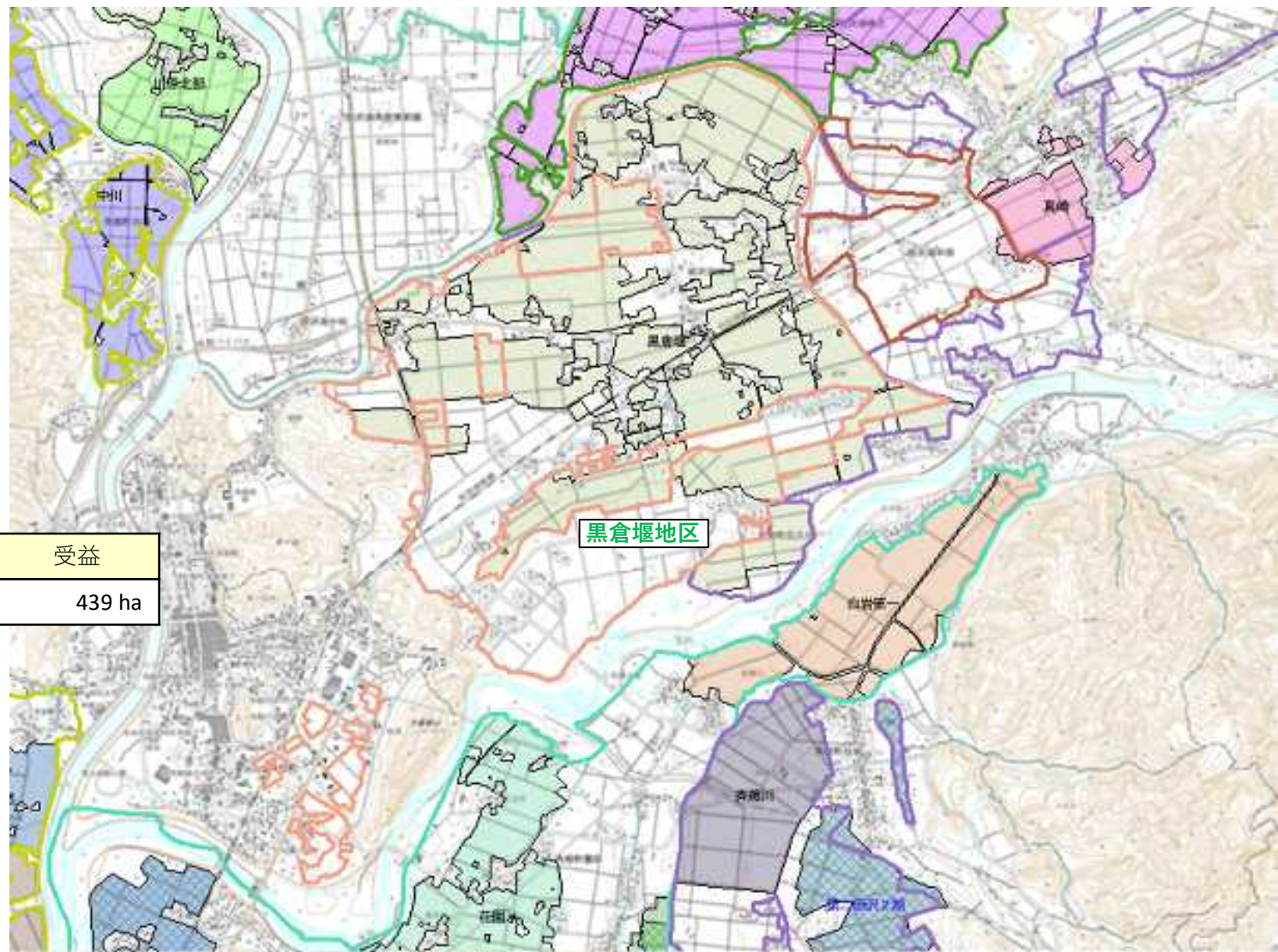
- 地区全体の取水源は玉川頭首工であり、仙北平野土地改良区と共通である。
- 受益地は便宜上、幹線用水路直接掛かり、支線用水路1号掛かり、支線用水路2号掛かりに分割される。



- 土地改良区の受益地は「黒倉堰広域活動組織」によりほぼカバーされている。
- 土地改良区は当該組織の構成員となっており、また当該組織の事務を受託。



■ 平成8年度から17年度にかけ、土地改良区受益の約85%でほ場整備事業を実施。



地区名	制度	工期	受益
黒倉堰地区	一般	H8～H17	439 ha

仙北郡黒倉堰土地改良区の歴史（仙北土地改良誌 二巻より）

沿革

本地域は、旧神代村、白岩村、角館町に跨る約400haの地域である。

黒倉堰の開削は古く、寛永年代にはじまるといわれている。旧荒川尻村は黒倉堰の開削によって開発された村と伝えられ、昔の玉川は毎年のように洪水があり堰根は破損し、関係農家から堰根人夫として出役し木杵の修理や流された詰石を下流から運んで杵に詰める作業が繰り返されていた。

大正12年黒倉堰申合水利組合が設立されて以来、組合は各部落から選出された16名の委員で構成運営されてきた。

しかし、堰止めの工法は原始的なものであり一度洪水があれば、農業用水はもとより飲料水にも事欠き、時には寒中に川に飛び込んで川止めしたこともあったという。戦後昭和22年の稀にみる大水害では、大きな被害を受け国の補助を得て60万円の工事費で復旧した。しかし災害はその後も続き、25年、27年にも大きな被害を受け災害復旧事業として国の補助を得て復旧することとなった。この事業は、当時団体営事業としては大規模なものであり、県の指導もあってこの事業の推進母体となる土地改良区を設立することになり、昭和26年10月4日三浦英吉外23名が設立認可を申請し、同年12月27日認可となり神代村黒倉堰土地改良区が誕生した。そして翌27年8月、頭首工の復旧工事に着手し、同11月には引続き温水溜池事業にも着手した。

その後28年、30年にも災害のため取水不能となり頭首工の復旧工事と並行して、それらの復旧工事も行われた。頭首工工事が多額の費用と苦難の末、ようやく完成をみたのは31年11月であった。用水は滔々として全域にゆきわたり、ひとしくその喜びにひたり昭和38年6月30日、困難を極めた黒倉堰頭首工完成のため、日夜をわかつた直接現場において指導監督に当られた藤川得三翁自らの筆による碑文を刻んだ記念碑の除幕と竣工式典が盛大に取り行われた。

しかし、それも束の間、この頭首工も時代の流れと世の移り変りには抗しきれず、10数年にして無残にも破壊される運命にあった。それは国営仙北平野農業水利事業の一環として、上堰をはじめ玉川より取水している数ヶ所の頭首工を統合し約1万haのかんがい用水を取水するため、本頭首工の直上流に新しく頭首工を築造する計画がたてられていたからである。そして40年頃から本改良区と県や農林省との間で、補償に関する交渉が開始されたが、その折衝は実に難行を極めて進行せず、ようやく解決をみたのは48年1月であった。

これにより48年度国営では玉川頭首工の築造に取りかかり、51年には近代的な頭首工が完成し、本改良区の用水毎秒4.0m³は専用の取水門により取水し、直ちにサイフォンで玉川を横断し旧黒倉堰に導水されている。

この完成により、当改良区の血と汗の結晶である黒倉堰頭首工は、昭和52年8月遂に破壊撤去され今は僅かに右岸の取入水門が昔の名残りととどめている。

その後国営事業で完成した頭首工のうち、当改良区に対する補償工事として実施した専用施設について昭和53年12月23日東北農政局長と当改良区との間に譲渡契約が締結され、また55年1月17日神代南田沢疎水土地改良区より47ha、同8月27日神代中央田沢疎水土地改良区より29haが、それぞれ地区編入され本土地改良区の面積は510haとなった。さらに57年10月29日付で建設大臣より河川法第23条、24条の許可が与えられ、本改良区の用水として毎秒4.0m³の取水が確定したのである。

玉川頭首工が完成し、51年4月から供用を開始することになり、この施設の円滑な管理と用水の配分及び管理費の分担について適正を期するため、仙北平野土地改良区と本土地改良区の間で交渉が続けられてきたが、これも補償問題と同様難行に難行を重ね8年の歳月を経て昭和60年7月ようやく管理協定が成立し、以来これにより頭首工の管理がなされている。

囚みに、本改良区における昭和61年度一般会計歳出決算額は、10,913,597円でこのうち維持管理費は3,241,159円(補修工事費1,829,600円を含む)で約30%を占め、頭首工の管理費は384,000円であった。(玉川頭首工管理協定により本改良区の負担は維持管理費総額の7%となっている。「仙北平野土地改良区の項を参照」)

黒倉堰とむらの歴史（仙北土地改良誌 三巻より）

藤原貫一

黒倉堰の開拓は遠く今を去る360年の昔、寛永2年(1625)即ち109代後水尾天皇の御代で將軍は三代家光、藩主は佐竹氏、角館の城主は芦名氏で城下町が田沢湖町小松本町城廻りにあった時代である。

慶長5年天下分け目の関ヶ原の終戦後、大名諸豪族の大移動と地方制度の改革が行われ、同7年佐竹義宣は徳川家康より「秋田仙北御知行あるべし。」の辞令をもらって常陸水戸より転勤した。

水戸50万石から20万石の秋田では財政的に困った佐竹侯が開墾、植林を奨励した事は当然であるが、当地方の場合角館城が院内川の度重なる水害に悩み、元和6年(1620年)今の角館町(当時は勝楽村)に城下町を移し町並を縄張りしたが、勝楽村の田をつぶすに当って城の東方、今の田沢湖町神代地区の開墾に手がける事となりその用水がいわゆる黒倉堰である。

当時の堰根は今の仙平堰堤の400メートルぐらい上流にあったとされるが、年々の水害で決壊し、遂に承応2年(1653)今のわらび座劇場横に御堰、御薪堰、中川原堰を統合し、以来325年間今の仙北平野玉川頭首工の築造で撤去されるまで、営々として黒倉堰が地域農民の血と汗で維持改良されてきた。当時の工法では鍬で箕具に入れ畚に移してかついだと言われ、佐竹の殿様の奨励事業とは言え、我々の先祖が重税と重労働を強いられた事は間違いない。

藩政の時代が過ぎ、それまで村々の重立者で運営されてきた堰根も大正の頃から水利組合と呼ばれ、予算や決算を併なった近代の運営になったが、いずれ水害の度に人足にかり出され木杵石積みの工法は変わらなかった。

昭利24年土地改良法制定、黒倉堰土地改良区を設立して本格的なコンクリート堰堤を築造する気運が高まり、26年設立申請、同年12月27日知事より設立許可となった。

堰根と言われた取入口が頭首工と名称を変え堰堤工事が始った訳であるが、玉川の急流をせきとめての工事のため何回か仮締切りが破られ小工事は難行を極めた。ために27年着工し、30年完成と3年間の工期を要して完成を見た。

木杵石積の苦役から解放され、借入金償還に苦労したとは言え、戦後の食糧増産のかけ声にはずみがつき改良区の平安な時が何年か続いたのだが、突如として昭和39年仙北平野用排水事業が着手され、新玉川頭首工が上流約2百米の所に築造、黒倉堰頭首工は廃止統合と言う協議がなされる訳である。